
ある日の春埼さん ~続・お見舞い編~

5マイル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある日の春埼さん ～続・お見舞い編～

【Nコード】

N3478P

【作者名】

5マイル

【あらすじ】

「ザ・スニーカー」2010年8月号/サクラダリセット第4巻「ある日の春埼さん ～お見舞い編～」の続編二次創作小説です。春埼さんがケイの部屋を訪ねる決心をした本編の続きからスタートします。

(前書き)

初めて二次創作小説を書きました。

つたない文章で原作のイメージを壊すのが怖いのですが、大きな心で見えていただけの方

春埼とケイの恋愛描写が気にならない方

ですが、よろしく願います。

春埼美空は歩いてケイのマンションを目指していたつもりだが、ケイの見舞いに行くように春埼を焚き付け見送っていた皆実未来からすると、全力で走っているようにしか見えなかった。

「もう、ほっとけないんだから二人とも」皆実は複雑な笑みを浮かべて春埼がマンションに入るのを見送った。

何度も来たことがあるケイのマンション、ケイが高校生になった時に一人暮らしを始めた際に借りた部屋だ。

頑張れば目隠ししてもケイの部屋までたどり着けるかもしれない、でも今日はアイスクリームが溶けてしまうと困るので止めておこう。そんな事を考えていたら、先ほどまで見舞いを止めようなんて悩んでいたことなど忘れたようにあっという間にケイの部屋のすぐ目前までたどり着いてしまった。

今踏みしめた、最後の一步の靴音が春埼の心に響く。ふと横を向くとガラスに映る春埼自身の姿が目に入った。鞆を肩から掛け両手にはスーパーのビニール袋と洋菓子店の袋、なんかダサイ。一番気になったのは一日着ていた高校の制服。

今更ながらに、家を出る時にきちんとアイロン掛けしてあった私服に着替えてくれば良かったと後悔する。もちろんケイはそんな事を気にしないと知ってはいるのだけれど。

時間にしたら一瞬の事だったのかもしれない、いや実際には1〜2分経っていたのかもしれない、だけど春埼には一瞬の事だったと思う。突然ケイの部屋の玄関が開いて、ケイと目が合った。

「ずっと、玄関先で何してるの？」やっぱり一瞬ではなかったのかもしれない、そう春埼が考えていると。

「ゴメンね、アイスクリームが食べたいなんてメールして」一瞬の空白「迷惑だった？」そう聞かれて春埼は首を横に何度も振る。

そして「皆実さんが……」、言ってから後悔した。うつむいた春埼の顔には誰も、たぶん春埼自身でも気がつかない位の曇りが見えるところがケイはその曇りを的確に、まるで春埼の心が分かるかのようにつまえていた。

「皆実に怒られちゃったよ、学校休むなら何で春埼に連絡してやらないんだって」ケイは春埼の頭を撫でながら、「いい友達だよな皆実は」そう言いながら部屋の中へ春埼を招いた。

いつも来るケイの部屋、キッチン、洗面台そしてベッド周りなど室内を見回す、やはり体調が悪くて何も出来ないでいたのであろう、室内やキッチンには食事をした形跡が無い、洗面台には洗濯物が溜まっている。

ベッドに腰掛けているケイを見るとやはりまだ顔色が青い感じがする。

「ケイ、体調が悪いのですから寝てください」とりあえず、2つ買ってきたアイスクリームを1つだけ冷蔵庫に仕舞い、袋に入っているアイスクリームを1つだけ持ってケイの側に行く。

ベッドに横になるケイに春埼は近づき、そして顔を近づけた。

「なっ、何？」いつものケイらしくらぬ驚き方でベッドから飛び起きる。

「ケイ、まだ熱があるのかと思っておでこで測ろうかと思ったんですが」

二人は同時に夕日に染められた頬の色になる、そう、ケイも先ほど皆実と話していると言うことは、U研の実験の話を知っている可能性があるのだ。

「ケイ、もしかして皆実さんから実験の話を知りました？」春埼は大胆にもストレートに聞いてみた。

しかしケイは黙ってる。その様子から聞いている事、いや皆実から実験の指令が下っているのは明らかだった。

「ケイ、せっかくのアイスクリームが溶けてしまいます」そう言い

ながら、春埼はアイスクリームのフタを開け、スプーンで食べやそうな量だけすくうと、ケイの口元にそれを運び「あーん」と自分の口を開けながら言った。

熱が出てまる一日食事をしていないケイは照れながらも素直に口を開くと、春埼が口元まで運んだその溶けやすい物を口に含む。お世辞では無く心の底からつぶやくように「おいしい」と言葉がもれた。

春埼はそのままアイスクリームを食べさせ続けるつもりでいたが、ケイが恥ずかしそうに自分で食べられると言い張るので、残念だけどアイスクリームのカップごとケイに渡し、ベッドから少し離れたテーブルの上にあるボックスティッシュの箱からティッシュペーパーを2〜3枚程手に取りケイに渡す。

「ありがとう」ケイが言う、春埼は笑顔で返した。

そのままキッチンへ行き、家から持参した土鍋を取り出すとおかゆを作ることにした。作り方はなんとなく分かっていたが、学校から自宅に帰る間に携帯電話を使って調べてあるのでバッチリなはずだ。エプロンをしてふとケイの方を振り返ると、おいしそうにアイスクリームを食べながらこちらを見ている。

「もしかして制服が変ですか？シワだらけとか？」

ケイは首を横に振りながら「一日着た服にシワがあるのは当たり前だし、変じゃない。春埼は何を着てもカワイイよ」

春埼は何度かケイにカワイイと言われたことがあるが、着ているものをカワイイと褒めてくれたのか、春埼がカワイイと言ってくれたのかどちらともとれる言い方をケイはいつもするので、ハッキリと春埼自身をカワイイと褒めてくれたのは初めての気がする。

とても嬉しい、うれしい、ウレシイ。ケイは違うと言っていたけど、やはり私はケイを好きなんだと思う。だって、カワイイと言われた事がこんなにも嬉しく感じるんだから。

「ところで、皆実が焦って電話してきたけど、何で家の前まで来て帰ろうとしたのさ？」春埼は正直に答える。お見舞いには来たかったこと、でもケイを起こしては悪いと思ったこと、U研の課題について悩んでた事は秘密。

「そっか、何か気を使わせてゴメン。実は前から渡そうかと思ってたんだけど」そう言いながらケイはベッドから立って机の引き出しから何やら小さな袋を取り出してきて春埼に渡した。

「何ですか？ケイ、この袋は」そう言いながら袋を開けると春埼は固まる「これって」そう春埼が言いかけると

「そう、この部屋の鍵、何かあった時に便利かと思って合鍵作っておいたんだけど、何となく渡しそびれちゃってさ」そう言うときケイはいたずらっぽく笑った。

「あのさ、鍋が吹いてるみたいだけど大丈夫？」そうケイに言われ、ふと春埼は我に返ると火を止める。さて、吹きこぼれてしまったらここから先はどうするのか春埼の知識には無い、かと言って携帯電話で調べながらおかゆを作るのも何となく恥ずかしい。

仕方がないと踏ん切りをつけ、いつもの涼し気な顔で「ケイは病人なんだからベッドで寝てて下さい」そう言うと、クルッとキツチンのほうを向き悩み顔になる春埼さんである。

なんとか、おかゆになりそうな気配が鍋からしてきた所で、春埼は洗面台に山になる洗濯物を片付けることにした。

ベッドの方を見るとやはりちよつと疲れたのか、ケイが寝付こうとしている。高校生の一人暮らしのくせに、乾燥機能が付いた洗濯機でもしかしたら春埼の家の洗濯機より高級なタイプなのではと思う。

ケイは頭はいいのに、風邪を引いたら早く治そうと考えないとこるとかとても幼稚に思えるが、洗濯物を見て更にその考えが間違っていないと気付く。脱いだ物がそのままなのだ。具体的に言えば、下着とトレーナーのパンツと一緒に脱いである。シャツは裏返しのみ

まなど、春埼は小さなケイちゃんのもう一人の母親になったような錯覚がした。裏返しのままのシャツを直しながら、下着とトレーナーを分離しながら、洗濯機に入れる。風邪をひく前から洗濯物を貯めてたのであろう、結構な量になった。

洗濯を開始し、おかゆを作っている鍋の様子を見るといい感じだ。後は火を止めて蒸らし食べやすい温度になればいいと思う。

ひと通りの家事をこなして一段落着くと、なんだか急に眠くなってきた。いけない、洗濯と乾燥が終わるまであと2時間、家に帰るわけにはいかない。そうだ、洗濯なんて予定に無かったからもう少し早く帰るつもりでいた。お母さんにメールしておこう。

少し帰宅が遅くなるとメールしたところ、すぐに返信があった。「お母さんは美空の事、信用してますからね」

ん？春埼は意味が分からなかったけど、信用してもらってるらしいので一応「うん、分かった、ありがとう」とだけ返信しておくことにした。お母さんは今さら何を言ってるんだらう？後でケイが起きたらケイに聞いてみよう。

お母さんの心配が分かるようになるのには、まだまだ時間がかかりそうな春埼さんである。

やはり眠気には耐えられないようで、春埼はテーブルの脇に置いてあるこの部屋で一番お気に入りクッションを枕に横になることにした。このクッションはケイが一人暮らしを始めた時に春埼がプレゼントしたものだ。

中学から高校に上がる年頃の女の子が選んだクッションにしては実用的な柄の、あまり目立たないクッションだが春埼は気に入っている。

実は最近では、もう少しカワイイ柄のクッションでもよかったかなど思っているのだが、ケイの部屋にそんなカワイイ柄で無くても思う。ふと、もしも他の女の子がこの部屋に来たときの事を考える

と、カワイイ柄のクッションを置いておけば牽制になるかな、なんて考えていたら少しだけ横になるうと思っていたのに眠りに落ちてしまった。

気がついたら、春埼の上には薄い毛布が掛けてあり、ケイは起きてシャワーを浴びているようだ。多分、ケイが掛けていた毛布なんだろう少し汗臭い感じがする。だけど、悪い匂いには感じず、ケイに包まれている気がした。

「春埼、起きてないよね？」ケイがバスルームの方から声を掛ける。春埼はそこで起きていると言うと、毛布を取られてしまうのではないかと、まるで幼児が毛布を取られまいとするのと似た感覚で何も答えなかった。

ケイが部屋に戻ってくるのを薄目で見てみると、一気に顔が赤くなるのが分かる、彼は裸なのだ。考えて見れば当たり前、1R00Mのこの部屋には隠れる場所など一切無い。バスルームを出たら、もうこの部屋なのだ。

ギョツと目を閉じ、寝ている振りをしていると

「もう、薄目じゃ無くてちゃんと目を開けて見ても大丈夫だよ」ケイが言う、ケイには薄目で見ていたのがバレていたのだ。

「ごめんなさい、ケイ。そんな、見るつもりじゃ無かったの」春埼は泣きそうな顔で言う「本当に見てたんだ？適当に言っただけなの」

春埼は両方のホッペを膨らまし、まるでリスのような顔で抗議する。それは以前ケイが春埼にやらせたらカワイイだろうなと思っていた仕事であった。

春埼は、1時間半ほど寝てしまっていたようだ、あと30分ほどで洗濯機の乾燥も終わる。ケイにおかゆを食べられるかどうか聞いたところ、食べたいと言うので2人で食べることにした。

少しだけ温め直しテーブルに土鍋をはこぶと、鍋敷きが無い代わり

に雑誌をケイが敷いてくれる。

「「いただきます」」二人で声を合わせる。

「味が薄いのはわざとですから、梅干も一緒に食べてください」

「いや、薄味なのは病気の時にはとてもおいしいよ」そう言ってケイは笑顔を見せる。

良かった、やっぱりお見舞いに来て。春埼は皆実に感謝した。

「ところで」ケイが何か言おうとする。

「なんでしよう？」いつもであればケイが何を言いたいのかおおよそ想像がつく春埼であるが、このタイミンでは全く分からない。

一呼吸置いてケイが話します「U研の実験なんだけど、どう思う？」春埼は焦って手に持っているお茶碗を落としそうになるのを耐えながらテーブルに置く。

「実験、してみましようか？」春埼は自分の口から出た言葉にビツクリした。でも、嘘です違うんですと言って否定したい自分はどこにも居なかった。

2人とも真っ赤な顔をしてたけど、先に口を開いたのはケイの方だった。

「いや、そう言う事じゃなくて、風邪をうつせば治るって信ぴょう性をどう思うかなって事を聞きたかったんだ」ややいつもよりトーンの高い声で言う。

「これだけ一緒の部屋に居れば、空気感染なのか粘膜感染なのか判別つきません、ケイは私とはちゅーしたく無いんですか？」そう言うって、春埼はケイをジロつと見る。

実は中学生の時にケイは春埼にキスをした。しかしそれを覚えているのはケイだけ、キスの直後にリセットしたからだ。あの時もしキスする時に春埼が目を閉じてくれてたらリセットし無かったのかもしれないと思うこともある。今の春埼ならどうなのだろう？

春埼の真剣な眼差しに「春埼キスしてもいい？」とケイが聞く、春埼は何も言わずにケイにしか分らない位少しだけ頭をコクつと下げた。ケイは春埼に顔を近づける、春埼はケイの目を見つめケイを受け入れる覚悟を決めそつと目を閉じた。

時間にしたら一瞬の事だったのかもしれない、いや実際には1〜2分経っていたのかもしれない、だけど春埼には一瞬の事だったと思う。春埼は幸せな時間に包まれていた。

そつとケイは春埼から離れ

「春埼、最後にセーブしたのは何時？」

「ケイが学校を休む前、昨日17時57分29秒です」そう答えながら、春埼は心臓の鼓動が早くなるのを感じていた。ケイとの今だけはリセットしたくない。

「ケイ、リセットするのですか？」いつもは絶対にケイの言う事を聞く春埼、それは春埼の3原則の0番目『私は、貴方に従います。貴方の行動と、言葉の全てを、信頼します』によって絶対的に守られるべき事だ。

もしケイがリセットを宣言したら、今回もやはり春埼はケイに従ったであろう、しかしケイの口から発せられた言葉は全く予想しなかったものだ。

「春埼、セーブ。僕はこの時だけはやり直したくない」

春埼はケイの目を見つめ、そのままケイに抱きついた。いやダイブしたと言う方が適切かもしれない。そして、ケイから春埼にしてくれたキスよりも、もつともつと長い時間のちゅーをした、セーブを実行しながら。たぶんU研の研究とは関係無く風邪がうつるんだろつなと予想しながらも。

洗濯機の乾燥完了のブザー音が、2人を我に返らせた。

「さて、さつさと食べちゃおうか、春埼もあんまり遅くなるといけないだろうし」ケイは春埼が自分の首に回している手をそつと外し

「おかゆ、温かいうちに食べちゃおう」と言った。

そういえば、春埼は先ほど母親から来た返信メールの意味が分からなかった事を思い出しケイに自分から送ったメールと母親からの返信メールを見せて聞いてみた。

ケイはおかゆを食べながら、春埼が差し出す携帯電話を覗き込み母親からの返信メールを見たときにむせ返った。いささか先程のキスシーンを思い出すと、春埼の母親は予知能力者なのではと思ってしまふ、実際にはそんな事は無いだろうが。

春埼には誤魔化しながら分かったような分からなかったような説明をし、ケイは心の中で『お母さんゴメンなさい』とつぶやいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3478p/>

ある日の春埼さん ~ 続・お見舞い編 ~

2010年12月10日07時25分発行